

# 「本物の人物」には 「見識と胆力」が必要

死後二十七年が経つ現在においても安岡正篤が語った言葉や書物は、多くの人に影響を与え続けている。安岡教学を学ぼうとする勉強会は全国各地で開かれ、経営者のみならず政治家、思想家など、さまざまな分野で、第一線で活躍する人材が集う。ヘッドハンティング企業の縄文アソシエイツが開催する経営者向けの勉強会「縄文塾(一)」も安岡教学を学ぶ勉強会の一つ。「古典を学ぶことを通して、お互いに切磋琢磨し日々の経営に活かす」ことを目的とし、安岡正篤の次男・正泰氏を囲む形で毎月開かれている。

安岡正篤の著書を「人の上に立つポジションに就く人には、必読の書の一つ」と語る縄文アソシエイツ社長の古田英明氏(56)に、なぜいま安岡教学を学ぶのか、その思いを聞いた。

## 「義命」と「時運」

私が安岡正篤先生に興味を持ち、傾倒した理由の一つが、「終戦の詔書」の一節でした。

一九四五年八月十五日、ポツダム宣言の受諾を昭和天皇ご自身が宣言された玉音放送として知られる「終戦の詔書」のなかに、次のような有名な一節があります。

「然レトモ朕ハ時運ノ趨ク所堪ヘ難キヲ堪ヘ忍ビ難キヲ忍ビ以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」

安岡正篤先生が「終戦の詔書」に手を入れたことは有名な話ですが、どこに手を入れたのかは、それほど知られていません。一つは、「以テ萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」は正篤先生が加えたところですが、もう一つ、「時運ノ趨ク所」とある箇所は「義命ノ存スル所」と加筆訂正

したそうです。しかしながら、その後の閣議で異論が出て、「時運ノ趨ク所」と書き換えられてしまったというところを、ご子息の安岡正泰先生にお聞きしました。

「時運ノ趨ク所」というのは、たまたまそうなってしまったという意味になります。つまり「運悪く、戦況が思わしくないから戦争をやめる」という、時の過ぎ行くままに成り行き任せのニュアンスになってしまったのです。そうではなく、正篤先生は新しい日本のために、義命に基づいて戦いをやめ「萬世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス」を「義命」に反映させているというのです。

私は、現在の日本が持つ危機的な混迷は、四五年八月一日に義命の存する所に戦争をやめたのではなく、時運の赴く所に戦いをやめたところに、すべての根本的なスタート

があるのではないかと感じました。もし「義命ノ存スル所」のままであれば、義命、天の意志を尊重して敗戦を受け入れることとなります。当然、戦後の再建も経済的な再建のみを優先するのではなく、もつと「天命」や「義」などを重視したものに変わったはずですが。しかし、「成り行き」を意味する言葉を用いたことで、戦後の日本人は、自由と民主主義の名の下に経済的な繁栄を果したものの、日本の伝統的な文化や精神の多くを失ってしまうことになってしまったのではないのでしょうか。

そう考えた時に、いまの混迷をどう乗り越えればいいのか。原理原則に戻らなくてははいけません。明治維新まで戻るのが、さまざまな考え方はあると思いますが、直近で考えれば四五年八月一日に戻らなければいけません。終戦の詔書を「義命ノ存スル所」と読み替え、その精神をもって、新たな日本を作り上げていかなければならないと思います。いまこそ「義命」「天命」とは何か、それをビジネスにどう反映していくかを考えるべき時なのではないでしょうか。

「縄文塾」で正泰先生と勉強会を開くようになったのは七年半ほど前のことです。私が安岡教学に深く傾倒していくキッカケになったのが、「終戦の詔書」ですが、これを知る



古田氏のオフィスには「一燈照隅 万燈照国」（一燈隅を照らし、万燈国を照らす）の書が掲げられている。

と思います。

### 本物の人物とは

流行で言えば流行にあたりません。「義命ノ存スル所」というのは不易のところですが、ものごとを大きく決断し、方向を変える時には、「時運ノ趨ク所」でやってはいけません。不易のところではやらなければいけません。不易とは何か。それを多くの方は直感的に感じるから、安岡正篤の書物に触れ、何かを得ようとするのだ

できなくなるんです。それはいまもそうで、正直、今回の取材も受けられないと考えました。しかしながら、正篤先生の考え方や思想には、もつと多くの人が触れていたかなくてはいいけない。そう思っただけで恥をしのんで応じさせていたわけでは

だと言っています。勉強だと「知識」にしかすぎません。中途半端な知識では意味がない。「人物」たるに必要な条件は「見識」だと正篤先生も言われているように、決断力をもって行為として実践しなくてはいいけないわけです。そして「見識」が実践に入るのは実践的勇気である「胆力」が必要になってきます。「胆力ある見識」として、

正篤先生は「胆識」という言葉を使われた。これがあつてこそ本物の「人物」だと言っているわけです。知らないよりは知っているほうがいいかもしれませんが、どこまで実践できているかが重要です。安岡教育学を言葉として知っている人は多いでしょう。しかし、それができているという人がどれだけいるのか。読めば「わかっているよ」という人もいます。でも、わかっているなんて言葉で片付けられるほど簡単なことではありません。安岡教育学を多くの人に知ってもらって、もつとお互いに訓練をしていかななくてはいいけないと考えています。

に及んで、一人で学ぶなんてもったいない。そこで正泰先生に、月に一回、いろんな経営者を集めますから教えていただけませんかとお願いたのが始まりです。二〇〇二年四月から、テキストに『百朝集』（関西師友協会）をはじめ、これまで『政治を導く思想―「貞観政要」を読む』（デイ・シー・エス出版局）、『為政三部書』に学ぶ』（致知出版社）など八冊、八〇回にわたって正篤先生の著書を中心に勉強会を開いてきました。そしていまは、『百朝集』の初版を題材に勉強会をしています。

きと考えるかを語っているわけですね。その時代に比べれば、いまの混乱なんて大したことではない。明日はもう生きてないかもしれない。この講話が最後の別れになるかもしれないという時に話されたことがまとめられています。改訂版が発刊されていますが、あえて初版を題材にしたのは、終戦前後の緊張と激動の時代背景を意識しながら読むことに意味があると考えたからです。現代の状況を考えると、いまの日本社会全般の混乱は何に起因しているのか。自民党政権が長すぎたとか、アメリカのキャピタリズムが悪かったとか、いろんな考え方はあると思います。そういったものを剥ぎ取っていった時に何が最後に残るのか。「時運ノ趨ク所」というのは、不易

人間学を勉強するにあたっては、正篤先生は非常にありがたい存在だと思えます。本を読んだ時に、多くの方が「その通りだ」「こう生きなきゃいけない」と思うでしょう。しかし、何年かすると、まったくできていない自分と向き合わなくてはいいけない時がくるわけです。私も、八年ほど読ませていただきましたが、ある時までは純粋に読むことができました。いろいろな社長さんと会った時に「安岡先生はこう言っています」と話していました。六年ほどして、ふと振り返ると、結局、正篤先生の言っていることが自分自身にまったく身につけていないと思ふようになって、恥ずかしくて口に

「B